

論文化新にテーマ光

浜松コンファレンスで2氏が講演

熱心に500人聴き入る

光をテーマに新しい文化論を語る「第八回浜松コンファレンス」(同実行委主催、中日新聞東海本社後援)が九日、浜松市成子町の市福祉文化会館で開かれた。星の光を分析、宇宙創造の神秘に迫る光学赤外線天文学研究の立場から、家正則・国立天文台助教授が「宇宙を見る—宇宙はどこまでわかったか」、光技術の最先端技術を紹介する書馬輝夫・浜松ホトニクス社長が「宇宙と光—この一年」と題し講演した。ともに光が生み出す未来の科学と新文化について熱っぽく語り、会場を埋めた約五百人は興味深く聴き入っていた。講演要旨は次の通り。

星からの情報を解析

家 正則氏
(国立天文台助教授)

宇宙に果てはあるのか。膨張しているのは間違いないが、いつまで続き、未来はどうなるのか現代の科学

では分からない。宇宙の始まり「ビッグバン」についても、なぜ膨張が始まったのか根本の原因は不明だ。それらを説明するため、天体がどのくらいの速さで遠ざかっているか、世界中の学者が調べている。何億光年離れても星が発する光から多くの情報を得られる。スペクトルの違いや赤外線、波長など、星の形態や密度、距離や温度まで解析できる。現在、地球から宇宙の果てまでを百とした場合残りあと十という地点で最も近い銀河が確認された。もう少しで人類の目は果てまで届くだろう。

先端企業として貢献

書馬 輝夫氏
(浜松ホトニクス社長)

国立天文台では八年後をめぐりに、ハワイへ口径八メートル、世界最大の望遠鏡を設置する。観測の大敵である大気の揺らぎを自動的に直す光学機械など、ハイテクを結集した装置で、二十一世紀初頭には宇宙の果てに限りなく近づけるはずだ。

われわれの文化や生命現象、それらを取り巻く宇宙、すべての根源は物質によって支配されている。原子から原子核、陽子、クォークへと、研究が進むにつれ物質は限りなくミクロに近づいている。現在の課題は陽子やクォークの結合力や構成を解明し、さらにミクロ化する事だ。

それでは物質を構成する原子や陽子などをつなぐ根本的な力は何だろう。それが解明できれば宇宙誕生の

なぞに迫ることができる。宇宙の始まり・ビッグバンのきっかけは何だったのか分れば、生命誕生の神秘も明らかになるかもしれない。

最先端の光技術はこれらの研究にもはや欠かせない存在で、来世紀へ向けて重要さを増すばかりだ。

文化という言葉は人類全体が過去に蓄積した知識の中だけで成り立っているもの。知らないことはまだたくさんある。この自覚を持った上で、先端企業として「世界中どこにもない」新しい文化づくりに貢献したい。



光をテーマに文化を語る家正則氏(上)と書馬輝夫氏(下)＝浜松市の市福祉文化会館で